



NGO活動紹介 ブルードット

フィリピン リマサワ島の人々と素敵な笑顔を！

フィリピンのレイテ島から船で40分ほどの位置にあるリマサワ島は、人口約6,500人の小さな島です。交通の不便さから経済活動へのアクセスが乏しいため、住民1世帯あたりの月収（約12,500円）は、政府の定める貧困ライン（1世帯あたりの平均月収約20,055円）を大幅に下回り、住民は厳しい生活を強いられています。気候変動の影響により台風や熱帯低気圧の被害が深刻化し、最近も2021年のスーパー台風ライ（フィリピン名：オデット）の直撃により、島は壊滅的な被害を受け復興にはまだ時間がかかる見込みです。

ブルードットは2013年のスーパー台風ハイエンによる復興支援を契機に、フィリピンのレイテ島で現地の人たちの自立支援につなげることを目的として活動をはじめました。10年以上が経過した現在も、貧困家庭の教育および生活向上に向けた活動を通して、現地の人たちの自立を支援しています。

現在、ブルードットはゆうちょ財団の2024年度助成を受け、リマサワ島における小規模養豚導入プロジェクトを実施しています。この活動では、①経済的脆弱層10世帯を対象に、豚小屋製作支援や飼育方法講義等による飼育スキルの普及を行い、②パイロット事業で成功した事例を共有し、販売時期調整や仲買人との交渉支援など、継続的な収入確保に向けたスキルアップを支援することとしています。

ブルードット代表の赤坂友紀さんと事務局長の角野成明さんにこのプロジェクトについてお話をうかがいました。

——団体の名前**ブルードット**の由来について教えてください。

赤坂さん：ブルードットの由来は、宇宙から見た地球の姿です。「地球は宇宙から見るとひとつの小さな青い点である」という宇宙飛行士の言葉からつけたものです。

——活動地のリマサワ島は日本ではおそらく知っている人は少ないと思いますが、**リマサワ島に着目したきっかけ**を教えてください。

赤坂さん：リマサワ島に着目したきっかけは、支援が届いていない状況を知ったからです。2021年にスーパー台風「オデット(国際名:ライ)」が襲来し、島全体が壊滅状態に陥りました。しかし、離島であるために支援が届かなかったことが問題となりました。地元の人のネットワークからこの情報を得たブルードットは、小回りの利く組織としてリマサワ島に注力することを決めました。

レイテ島周辺は太平洋戦争の激戦地として知られています。レイテで戦死したおじいさんがいる方からレイテの貝を持ち帰ってほしいと言われ、ちょうど去年の8月にそれを持ち帰りました。それをもって法要をされたそうです。80年前にはお互いに戦って殺し合わないといけなかった場所で、今はブルードットとして、お互いに助け合えることができるというのは、すごく大事なことだと考えています。



(写真2)：丘の上から見るリマサワ島中心部



(写真1)：村長宅にて。右端が赤坂さん左から2人目が角野さん

——**2024年度に小規模養豚プロジェクトを行うことになった経緯**を教えてください。

赤坂さん・角野さん：まず、リマサワ島で2023年度のJICA基金活用事業として養鶏支援を実施しました。住民がひな鶏を飼育し、鶏肉を販売して副収入を得てもらうことが目的です。事業は順調に進み、住民の全員が鶏の飼育を継続しています。

小さな島内で養鶏だけを増やしても、マーケットが飽和してしまいます。このため、小規模養豚プロジェクトは住民地元のリクエストに応える形で2024年度ゆうちょ財団の助成を受けて始めたものです。子豚を飼育して大きくし、食肉として販売することで副収入を得てもらうことが目的です。

養鶏が約45日で出荷できるのに比べ、養豚は出荷までに3カ月程度かかります。このため、養豚は資金の回収までに余裕がある人で、力仕事ができ、条例で決められた地域での飼育が必要となり、同じ貧困層の中でも、養鶏とは条件が少し違ってきます。また、養豚については、アフリカ豚熱という病気が他の島で流行っていて豚肉が高騰しています。しかし、リマサワ島は離島であることを活かして町役場が徹底した水際対策を行っており、適正な価格で地産地消が可能な環境にあります。また豚へのワクチン接種や病気への対応も協力関係のある町役場の農水産課のフォローを適宜受けられます。



(写真3)：養豚を行う人々との事前打ち合わせの様子

——**養豚を行う人々をどのように選んだのですか。また、その際に配慮した点を教えてください。**

赤坂さん、角野さん：公平性と透明性を確保するため、選定基準を明確にし、選定過程を公開しています。そして、村長や地域の権力者の政治的な関与を防ぐために、町役場や社会福祉課にご協力をいただきながらも、私たちが候補者全戸をまわり最終的には私たちが選定しました。養豚を継続する強い意志や必要な経験を持つ人々を選ぶよう念入りに聞き取りを行い、選定後には選定条件(①経済的な脆弱性、②養豚への意欲、③家畜飼育に対する抵抗がないなど)を村役場の掲示板で公表し、不服があれば地域住民の意見を聞き入れるようにしています。

——**リマサワ島で支援を行うにあたりどのような課題や困難がありますか。**

赤坂さん、角野さん：現地での時間の流れや進行は、日本のように厳格ではないため、予定通りに進まないことがあります。たとえば、定期的なモニタリング調査が予定されているにもかかわらず、現地コーディネーターとの打合せがスケジュール通りに行われないことなどです。このような場合、適切なバランスを保ちつつ、現地コーディネーターの自主性を損なわないように配慮しています。管理しすぎると彼ら

の柔軟なアイデアが出にくくなるおそれがあるため、バランスの加減が難しいですが、常に気を配っています。

——**5月に現地に行かれて活動の立ち上げを行ったということですが、今回の訪問でわかった課題や新たな発見はありましたか。**

赤坂さん、角野さん：活動の立ち上げでは、子豚の手配を行いました。6月中旬には10名の養豚を行う人たちのもとに最初の2匹ずつ子豚(写真4)が届く手はずになっています。出荷までには3カ月くらいかかるので養豚の経済効果が具体化するのはいずれからというところです。養豚を行う人たちは、飼育の準備を進めるとともに、高値で販売出来るよう成豚の出荷時期を検討しています。

また、食肉にするまでには屠殺というプロセスがありますが、これを行うためにはライセンスが必要です。ライセンスを持っている人を巻き込んでいくにはどうすればよいかとか、マーケットにアクセスできるキーマンをおさえておくとか、実際のビジネス展開を考えて必要な課題の対応を講じました。



(写真4)：養豚を行う人々に配られた子豚

——最後に、ブルードットさんの将来的な展望や計画、新たなプロジェクトや目標があれば教えていただけますか。皆さんへのメッセージなどがあればお聞かせください。

角野さん：現在、ブルードットは任意団体ですが、法人化する準備を進めています。

今回、初めてレイテ島とリマサワ島に行きました。現地の人々のポテンシャルはもともと高いので、それを引き出すお手伝いをする姿勢で臨んでいます。これからも現地のニーズに基づいてプログラムを設計し、地域の人々が自分たちの力で発展できるよう支援したいと考えています。

赤坂さん：養豚は5月にはじめてばかりですが現地の人々からは既にすごく感謝していただいています。

経済的な理由で、子どもが大学を休学せざるを得なかった家庭が、養豚メンバーに選ばれたことで進学を決めたとの声も聞きました。

ゆうちょ財団をはじめご支援していただいている皆様にも感謝申し上げます。

今後の目標は、養豚チームが養鶏チームのように収益を持続的に上げることです。養鶏チームは小規模の協同組合を組織し、ひな鶏の共同購入やメンバーでお金を出し合う無担保融資など検討しています。養豚チームも子豚や初期投資の支援だけで終わらず、収益を持続的に上げる仕組みを作りたいと思います。そして、リマサワ島をモデルケースとして、他の地域でも同様の事業を展開していきたいと思っています。

また、レイテ島やリマサワ島は経済的には課題がたくさんありますが、住民がお互いに助け合いながら仲良く暮らす、笑顔がたえないとても素敵な場所です。浜辺で見る夕日も素晴らしいです(写真5)。

ブルードットではスタディツアーなども実施可能ですので、日本の皆さんもぜひ一度訪れてみてはいかがでしょうか。

——赤坂さん、角野さん、ありがとうございました。



(写真5)：リマサワ島の浜辺から見る夕日

2024年度多文化共生推進助成の募集について

近年、国内では外国人の受け入れの必要性が高まる中で、文化的背景を異にする人々が共生する社会を構築することが求められていることから、ゆうちょ財団では、民間団体が行う多文化共生の推進に寄与する活動を対象に、活動経費の一部を助成する取組みを本年度から開始しました。

【2024年度多文化共生推進活動助成の募集について】

団体としての活動開始後2年以上が経過しており、直近2年間の収入平均が5,000万円未満の民間団体が行う多文化共生の推進に寄与する活動(国内で実施するウクライナ避難民支援活動も含む。)を対象に助成を行います。

2024年度においては、助成金額は1件50万円上限(2件程度の採択)とし、2024年5月15日～6月14日の間、申請を募集しました。助成団体は8月に決定する予定です。

編集後記

今回のNGO活動紹介では、2024年度の助成団体としてフィリピンで活動する「ブルードット」の取組みを紹介しました。2013年の台風により壊滅的な被害のあったレイテ島の復興支援活動の際に、被災しながらもたくましく生きる現地の人々の満面の笑顔に癒されたというエピソードが印象的でした。今後ますますのご活躍をお祈りしております。また、TOPICSでは2024年度多文化共生推進活動助成の募集についてレポートしました。

当財団は本年5月に市ヶ谷のビルに移転しました。環境が変わり、新たな気持ちで業務に取り組んでいます。今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。